ムラサキシキブの実

復刊84号

妙の光（たえのひかり）

秋の境内は色々な植物が実をつけるので、鳥たちも嬉しそうに飛び交う。紫色でひときわ目立つのが、このムラサキシキブの実。11月ころ小さな実が集まって熟し、葉が落ちて紫色の実だけが残るのも美しい。

江戸時代の植木屋が、平安時代の女性作家「紫式部」になぞらえて名付けたという説がある。確かにそれらしい気品が漂う。他にも紫色の実が敷き詰められたように付く「むらさきしきみ（紫敷き実）」が訛った等々、諸説あるらしい。

紫色は昔から高貴な色とされ、位の高い僧侶の衣の色が紫なのもここからきている。紫色は自然界から取りづらいために、貴重な色だったからという。本来のお釈迦様の教えからすれば、質素な墨染めの衣が原点なのだが。

（文・写真　小川住職）

むらさきしきぶ　熟れて野仏　やさしかり

河野南畦

通巻104号　復刊84号　2013年9月15日（季刊）　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

行事案内

秋のお彼岸中日法要 9月23日㊊㊗

■午前10時半 …安穏廟法要
（終了後、本堂にお参り）
■11時 ……秋季彼岸会中日法要（本堂）
■12時 ……おとき
■午後　1時 ……住職の法話
※どなたでも、静かにゆっくりとお参りいただけます。おときは当日受付でお申込み下さい。

お会式と第12回法号授与式10月27日㊐

■午前9時…… 法号授与者研修
■11時 …… お会式、法号授与式
■12時 …… おとき
■午後　1時…… 渡辺隆次さん特別記念講演
※詳細は別紙ご案内をご覧ください。生前戒名のご案内は8ページです。

秋の一日研修 11月16日㊏

■午前9時～午後3時
※詳細は8ページに。

あとがき

慌ただしい妙光寺の夏の余韻の中で、今号をつくりました。「教えてお上人」は、妙光寺の開創の歴史をひもときました。「寺庭から」には、なぎささんの修行の決意が綴られています。不肖私もぜひ、この素敵な修行に参加したいと思います。また「送り盆」会場で行った『妙光寺版・終活ノート』大編集会議の模様も、ご報告しました。『終活ノート』は、完成しだいお届けします。ご期待ください。なお編集の都合で「信心」のページはお休みしました。　（新倉理恵子）

月例信行会 10月6日㊐・11月3日㊐

■毎月第1日曜日　朝7時～9時
■会費/千円（各自さい銭箱へお願いします）
※予約不要。当日お寺へお越しください。お参り、法話、作務、朝粥の朝食やコーヒータイムもあります。

月例ボランテラ 毎月15日

■午前9時～11時半　午後1時～3時
境内の清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越しください。昼食はご持参願います。

渡辺隆次展 10月10日㊍～11月4日㊊㊗

■午前10時～午後5時（10/20は～午後4時）
■休館…月曜日（10/14・11/4を除く）
火曜日、10/18
※詳細はチラシをご覧ください。

渡辺隆次作品「枯野」（部分）

舞台公演『ASYL』

■①10月19日（土）18：30
②10月20日（日）17：30（入場料3,000円）
※詳細はチラシをご覧ください。

舞台『ASYL～アジール～』

700人身延山大法要の宿泊でいろいろと便宜を図ってくれた『八ヶ岳ロイヤルホテル』よりお得なプランのチラシが届きました。宜しかったらご利用ください。

『妙光寺版終活ノート』
160人の大編集会議

「もっと身近なエンディングノートが欲しい」の声に応えて、8月24日『万灯のあかり～妙光寺の送り盆～』の中心企画として、「妙光寺版終活ノート」大編集会議を行いました。皆さんの声を聴き、ノートに反映させる会議は、盛会でした。

院庭で160人の編集会議

色とりどりの千提灯のもと、午後1時半、編集会議が始まりました。参加者100人を予定して資料を用意しましたが、次々と入場者が増え、スタッフが資料増刷に走ります。最終的には160人の方が、参加してくださいました。

壇上には小川住職・井上治代東洋大学教授(エンディングセンター代表)・菊池泰啓さん(大分市妙瑞寺住職)・薄井秀夫さん(寺院コンサルタント)・中村宣雄さん(会議コンサルタント)の5人の発言者が座りました。参加者の手元には、小川住職手書きの『妙光寺版・終活ノート』原案が資料として配布されています。資料説明の後、15分間アンケート記入の時間がとられました。資料にある10項目のうち自分で関心の高いものに点数をつけて投票します。さらに意見や感想を自由に記入する用紙があり、皆さん戸惑いながらも一生懸命書いてくださいました。

160人の意見が、巨大な模造紙に

『皆で歌おう』コーナー進行中の1時間半の間に、アンケートに記入されたすべての意見を、別室で5人の発言者がもれなくまとめます。やがて参加者が再度会場に集合、まず関心の高い項目の集計表が配布されました。

続いて参加者の前に、縦2メートル横5メートルの巨大な模造紙が掲げられました。『私の終活ノート』と大きくタイトルが書かれた下には、160人が書いた

300項目ほどの意見と感想が整理されて貼られています。会議コンサルタントの中村宣雄さんが、模造紙の前で内容の全体像を説明します。

完成は年度内に

皆さんの関心の第1位は「心穏やかな最期を迎えたい」ということでした。「気がかりをなくし、めいわくをかけずに」という切実な声や、「妙光寺の檀徒と安穏会員の違いは？ 会員はどこまでお願いできるのか」という質問も多く寄せられました。小川住職や発言者の答えは、後日お届けする『妙光寺版・終活ノート』でご覧ください。参加されなかった方の不安やご質問は、お早目になんでも妙光寺にお寄せください。

『妙光寺版・終活ノート』は今後半年余で作成、全員にお届けする予定です。

(編集部・新倉理恵子)

見えない結果に祈る

小川英爾

温かい家庭に突然の不幸

新潟市の鈴木さん(仮名)夫妻は娘2人だからと、5年前に安穏廟を申し込まれました。社内結婚した夫妻は、同い年で当時54歳でした。

ご主人の仕事柄単身赴任が長いせいか、はたから見てもとても仲の良い家族で、揃ってお寺の行事にも参加されていました。3月の開創700年法要にもご夫婦で参加し、ご主人は身延山から東京の仕事先に直接戻って行かれました。「定年になれば、もっと落ち着いて妙光寺さんにお参りできるね」と話していたそうです。

ところが翌月の4月中旬、妻の華子さんから妙光寺に電話があり「夫が会社を変わり新潟に戻った矢先の今月初め、進行性の胃がんで余命3カ月と言われました。7月には長女の結婚式も控えています。私はひとり娘で夫も東京に兄が一人いるだけで、相談相手がいません。どうしたらいいのでしょう」とおっしゃいます。「大変でしょうが、とにかく看病を最優先してください。残された時間を少しでも大切に過ごせるようにしましょう。もしものときは妙光寺で一切お手伝いしますから、心配しないで」とお応えしました。

そして2か月後の6月中旬「いま夫が亡くなりました」と、連絡があったのです。

葬儀の参列者は家族3人と東京の義兄夫妻、それに華子さんの叔母さんだけというので、小規模にできる『京住院』にご遺体をお迎えしました。「会社を変わったばかりで」ということでしたが、何度も見舞ってくれた元同僚にお知らせしたら、東京からも含めて参列者が30名を超すことが分かり、急きょ式場を本堂に変更です。受付やら接待やらに長女の婚約者も来て、家族総出です。祭壇の遺影は病床のご主人と、ひと足早く借りてきたウエディングドレス姿の長女を中心にした病室での家族写真でした。

結果は来世に

家族仲も良く周囲に慕われ、しかもお寺とのご縁も大切にされるような方が、なぜ60歳の若さで娘の結婚式直前に逝かなければならないのか。誰しもが思うことです。住職としてもかける言葉に悩みました。

「仏教では〝因果(いんが)〟と言って、結果の元には必ず原因があると教えます。しかし今日の鈴木さんのように、善いことを積み重ねた原因があっても、必ず良い結果に恵まれるとは限らないのも現実です。じつは仏教では三世といって私たちは前世、現世、来世の三世にわたり生きると説きます。だから必ずしも現世だけで結果が見られるとは限りません。目に見えない次の来世で良い結果が見られると信じることを教えています。この世で見える見えないにかかわらず、努力し、見えないことにも感謝し、良い結果を祈ることが大切です」と、お通夜で法話させてもらいました。

通夜振る舞いの席で、婚約者のお父さんから「仕事柄多くのお通夜の席に伺いましたが、今夜のお話には感銘を受けました」と仰っていただきました。

葬儀の全てが終わると華子さんは「家族みんなで一所懸命やったね。お父さんも喜んでいてくれる気がする。さあ、今度は結婚式だ。衣装合わせも何も準備できていないから大変だ」と、爽やかにも見えるお顔で遺骨を抱えて帰られました。

一羽の蝶

7月末、華子さん、次女、長女夫妻の4人で四十九日法要がありました。義兄は結婚式の直後なので辞退されたとのこと。結婚式のあいだ中、一羽の蝶が新郎、新婦の周りをずっと飛んでいたそうです。「きっとお義父さんだねって、2人で話していました」と長女のお相手が聞かせてくれました。

夏の「送り盆」に集う

僧侶に聞く

開創七百年記念

インタビュー

お寺と人々の新しい関係を、妙光寺にみつけた

8月は、いつにも増して妙光寺は活気に溢れます。「万灯のあかり～妙光寺の送り盆～」（フェスティバル安穏）もその一つです。今年の「送り盆」は24回目。来年には四半世紀を迎えるこの行事には、毎年500人ほどの参加者が訪れます。

大勢の僧侶による法要も行われます。日本中からやって来たお坊さんたちが、妙光寺の「送り盆」を支えているのです。今年の「送り盆」に参加してくださった3人のお坊さんに、妙光寺への思いを語っていただきました

Q 皆さんが妙光寺に来たきっかけを教えてください。

伊藤 大学で、これからの寺の新しい取り組みやあり方を研究テーマにしたいと考えていた時、雑誌の特集記事の中に妙光寺をみつけました。新しいことに取り組んでいるお寺は、最近になって取り組みを始めたところが多いのです。妙光寺はその当時で20年も前から取り組んでいると知って、驚きました。

松脇 22年位前、私は日蓮宗現代宗務研究所の研究員をしていまして、そこで小川住職とご一緒しました。まだ安穏廟も始まったばかりで、マスコミにも取り上げられていない頃です。宗派を問わない永代供養墓は、全国初の試みでした。どうも普通の寺と違う事をやっているらしい、ということで夏のフェスティバルに来てみたわけです。来てみると、こんな田舎のお寺なのに活気がある。首都圏からも人がたくさん来る。なぜだろうというので、妙光寺に通うことになりました。

菊池 私は松脇さんとは大学の同期で、学生道場（日蓮宗の学生寮）でも一緒に暮らした仲です。私自身はお寺の息子ですが、大学で学問として仏教を学んでみると、故郷の寺で接している仏教とは違いもありました。生きた人との関わりの中に本当の仏教があるのではないかと考えて、悩んでいたのです。そんな時に、松脇さんから新潟におもしろい寺があると誘われて、とにかく住職に会ってみたいと思いました。まだ20代後半でしたから、2人で大型バイクで妙光寺に通いました。私は大分から、松脇さんは東京から出て、大阪でおちあって一泊して、新潟に翌日到着しました。若かったし一番安い移動手段だったし、それで小川住職からは「坊走族」なんて言われて、楽しい思い出です。

Q 実際に妙光寺に来てみた印象は、いかがでしたか？

松脇 フェスティバルの法要が、普通のお寺の法要とは雰囲気が違うことに驚きました。普通のお寺の檀家さん達は、いわば習慣や義務として、寺の行事に来ています。でもここでは、文字どおり皆が参加して法要が行われていました。

菊池 小川住職のキャラクターが、人を惹きつけているということはもちろんあります。でも、普通のお寺は住職の許容範囲の人しか受け入れない場合が多いのです。ところがここでは、多様な人たちがのびのびと動いて、自由に参画していることに感心しました。

伊藤 私は5年前から夏の送り盆に参加していますが、本当に風通しのいいお寺だなぁと思いました。本堂のつくりも斬新で、物理的にも風通しがいい。でも何より、人と人の関係が自由なんですね。生家の寺で知っていた人間関係は、寺族と檀家さんの関係でした。でもここでは、僧侶であり、参加者であり、檀信徒の方もいれば安穏会員さんも、単なるスタッフもいる。こういう関係もあるのか、と思いました。

左より、伊藤悠温さん、松脇行眞さん、菊池泰啓さん

菊池泰啓さん
（51歳・大分市妙瑞寺住職）
平成10年「大分安穏廟」を境内に開設。葬送を考える市民活動に積極的に取り組んでいる。

松脇行眞さん
（50歳・鎌倉市圓久寺住職）
妙光寺で奥様と出会い、小川住職夫妻の仲人で結婚した。現在は、住職の長女良恵さんの師僧でもある。

伊藤悠温さん
（28歳・名古屋市本覚寺僧侶 大学院博士課程在学中）
修士論文の研究テーマに妙光寺を取り上げた。論文タイトルは『出会いの場としての仏教寺院』

Q この二十余年の妙光寺での体験を振り返って、いかがですか？

菊池 初期のフェティバルでは、有名な講師を招いて講演を聴き、そのあとで講師を交えて参加者が話し合う「座談会」がよく行われました。そこでは、従来のお寺に対する批判や不満も率直に出されました。私たちも僧侶だからこれを言ったらまずいと思うこともなく、対等の立場で意見交換をしました。

その対話の中で、法要の内容も考えなければいけないと思うようになって、現代語の祈りも行うようになりました。法要の儀礼も、工夫してきました。同様の試みをしている人は他にもいますが、参加者との話し合いの中で必要を感じた僧侶が創りあげたという点が、妙光寺の特徴です。檀家以外の人達にも法要の儀礼を理解してもらうために、従来の法要の形を変えていく。でもそれは、世の中に対する迎合（げいごう）かもしれない。本来の仏教はどうあるべきか、安穏会員の位置づけはどうすべきか、小川住職によく意見を求められました。

Q 安穏廟では、他宗派で葬儀をした人や、信仰を持たない人も受け入れていますね。

菊池 宗派を問わずに受け入れて、何もお寺の姿勢を示さなければ、ただの「墓の販売」になってしまいます。壇信徒になることを強要はしないけれど、お寺のメッセージに耳を傾けてもらうことは大切です。

松脇 日蓮聖人が好きで安穏廟を求めるという人は、少ないと思います。まずは「自分や家族の墓をどうしようか」と悩んで妙光寺においでになる。そして小川住職への信頼が、安穏廟への信頼につながる。会員から壇信徒になる方もいる。考えてみれば非常に順当なルートなのですが、普通のお寺とは全然違うのです。妙光寺では、実質的に動いている人が寺を支えています。その影には、小川住職の大きな努力があります。

Q 確かに小川住職は、一人ひとりの檀信徒さんや会員さんを大切にしながら、新しいことに取り組んでおられます。よそのお寺が妙光寺のようにならないのは、なぜですか？

松脇 伝統的なやり方だけで、まだやっていけると思うからですよ。でも、歌舞伎や落語と同じように、寺も現代にあわせて少しずつ変わっていかなければならないんです。

伊藤 でも新しいことをやっていくのは、大変です。私の実家の寺でも、兄が若い人にお寺に来てもらう活動をしていますが、父が元気で日常のお寺の仕事をしているから、兄は新しいことに取り組めるのです。小川住職が、時間的に物理的にどうやっているのか、うかがってみたいです。

菊池 いいお坊さんというのは、いろいろな状況の中で生まれると思います。確かに小川住職は先見性があって、世の中を分析する力もある。でもそれは、妙光寺を何とか運営していきたいというところから始まったんです。切実なきっかけから安穏廟に取り組み、悩みながら今に至った。妙光寺は本当にすごいけれど、すごいと私たちが言っているだけではおもしろくない。妙光寺に来ると、小川住職の取り組みを一つのモデルにして、お坊さんとしての人生プランの設計をしようという気持ちになるんです。ここに来るといつも、いかにお坊さんらしく自分を表現するかを考えさせられます。

妙光寺は「僧侶の生き方」を考えさせられる場所…。いいお話を、どうもありがとうございました。

（聴いた人　編集部・新倉理恵子）

寺のうごき 夏

万灯のあかり
～妙光寺の送り盆～
8月24日（土）

里帰りしていた精霊を浄土へとお送りします。

境内には、約500人の参加者が集いました。11時の開門と同時に、和やかな笑い声が響きます。七面様横では風船を使った大道芸。華麗な技の連続に、子どもも大人も夢中でした。院庭では、『終活ノート』大編集会議と「みんなで歌おう」コーナー。カラフルな千提灯の下で、歌声が響きました。夕方の法要と同時に、墓地の800ロウソクと700個の川灯籠に、あかりが灯されます。小川住職夫妻のデュエットもあるなど、大いに盛り上がった交流会の後、揺らめく灯の中、東屋での祈りに皆で手をあわせて、今年の「送り盆」は終わりました。

前日までの雨が嘘のように、晴れわたった一日でした。

バザールも大盛況！

「千提灯」の院庭

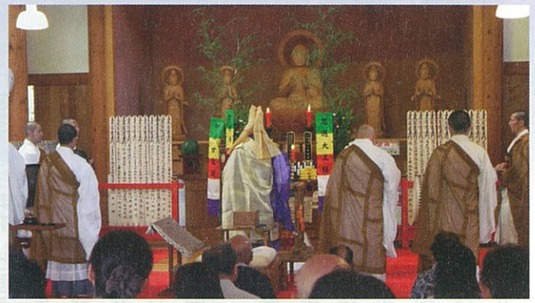
食事をしたり、お茶を飲んだり、おしゃべりしたり…。

「みんなで歌おう」

生ギターの伴奏で歌う懐かしの曲!過ぎ去りし青春の日々にタイムスリップした楽しいひと時でした。

お盆参り　施餓鬼法要
8月1日（木）

祖先の霊をわが家へとお迎えする日です。



ご宝前に施餓鬼塔婆を立ててご供養。早朝からの受付係は世話人の皆さんです。

手作り体験コーナー」

「蓮の花飾り」に加え、今年は「蓮のキャンドル」作りも。笑顔がいっぱいでした。

「前寺カフェ」

前寺「京住院」では韓国キルト「ポジャギ」の展示。韓国のお茶とお菓子が楽しめるカフェも終日賑わいました。

「Syanのバルーンショー」

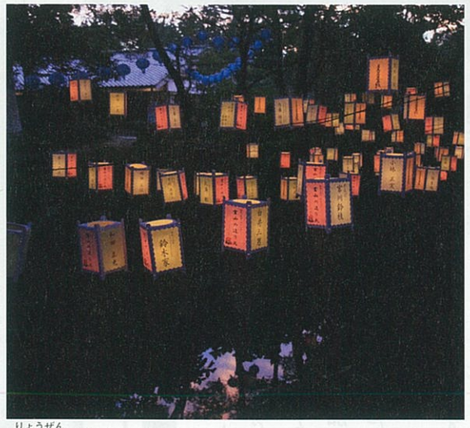
毎年子どもたちが楽しみにしている「大道芸コーナー」。今年はバルーンアートの日本チャンピオン登場で、会場はおおいに沸きました。

「法要」

住職の長女、良恵（りょうけい）さんも出座。本堂の内も外も掌を合せる人で埋まりました。

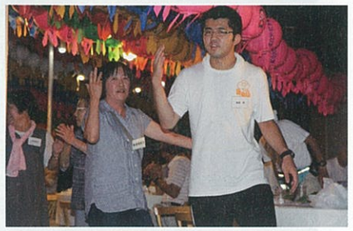
住職とトーク」“みんなで作ろう終活ノート”

予想を上回る参加者で、皆さんの関心の高さが伺えました。詳しくは3ページを。



「霊山（りょうぜん）の送り火」

開創700年。700基の灯籠が境内の川面に映え、その灯りは幻想的で、まさに浄土へと精霊を送る光の川でした。



「夜の交流会」

語り、歌い、踊り…人の輪がつながります。

角田山妙光寺インフォメーション

秋の行事

今年は開創700年
これを機に生前に戒名を

『法号授与式』

10月27日（日）午前9時集合

戒名は仏様のお弟子になった証ですから、生前につけるのが本来です。戒名をいただいて、その後の人生を戒めるという意味があります。日蓮宗では法号といいます。

妙光寺では毎年「会式」に合わせ、『法号授与式』を行っています。今年は妙光寺開創700年目の特別な年です。これを機会にぜひ考えてみてはいかがでしょう。

お名前と法号を金糸で刺繍した略式の袈裟と数珠の記念品が付きます。費用は3万円です。

生前戒名をご希望の方は同封のハガキ、電話、メール等でお問い合わせください。折り返し詳しい説明書をお送りいたします。

◆締切　10月1日（火）

『お会式』と特別講演

10月27日（日）午前11時

日蓮聖人のご命日の法要を、『お会式』といいます。今年は特別講演として、画家の渡辺隆次さんにお越しいただき、自然とそこに生きる生命たちについての興味深いお話をしていただきます。同時期、客殿にて「渡辺隆次展」を開催します。

詳しくは別紙案内をご覧ください。

昨年の講演風景

秋の一日研修

11月16日（土）午前9時～午後3時

お寺のこと、お経の意味、お参りの作法などを学ぶ日帰り研修です。堅苦しいことは、一切ありません。どなたもお一人でも気軽にご参加いただけます。以前に参加された方には、更に上のコースがあります。

費用は昼食付で4千円です。同封のハガキ等で11月9日（土）までにお申し込みください。

誌上法話　小川英爾

実にこの世においては、恨みに報いるに恨みを以てしたならば、
ついに恨みの息むことがない。
恨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。

（『発句経』中村元・訳）

スリランカという国

インドの東隣50キロのインド洋に浮かぶ小さな島国、スリランカをご存じでしょうか。昔はセイロンといい、いまも紅茶で知られています。面積は北海道の8割しかありません。この国の人々の多くは熱心な仏教徒ですが、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教もあって、宗教間対立による紛争が今も起きています。

救われた日本

実はこの国の一人の政治家に戦後の日本が助けられたことで、私たちのいまがあるという事実が忘れられようとしています。それは昭和26年9月、日本の戦争責任と懲罰を連合国が議論する『サンフランシスコ対日講和会議』でのことです。一部の国からは、日本を米英中ソの四カ国で分割占領し、首都の東京は四ヵ国が共同占領するという強硬な案が出されました。

会議の席上、スリランカ代表で当時の財務大臣ジュヤワルデネ氏が、51か国の代表を前に冒頭のお釈迦様の言葉を紹介し「自分の怨みを捨ててこそ、怨みの連鎖はやむ」と、自国の日本への賠償請求権を放棄すると宣言したのです。さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と、日本の分割論に反対しました。この演説が日本の分割統治案を真っ向から退けたことで、日本国民を勇気づけ、戦後の復興が始まったといわれています。

この戦争でスリランカは直接の侵略を受けることはなかったものの、重要産品の生ゴムの損害は大きく、賠償請求して当然だったそうです。しかしながら熱心な仏教信者として、お釈迦様の言葉を実践したのでした。

お経は口だけでなく身で読む

この話を紹介した本（『仏陀南伝の旅』白石凌海著）を読んでいたこの夏、人気テレビ番組『世界ふしぎ発見』で、この演説が取り上げられたのを偶然見ました。番組の最後に出演者の黒柳徹子さんが「こんなに大切な話なのにちっとも知りませんでした。どうして学校などで皆さんにもっと教えないんでしょう」と言われたことにまったく同感です。

ジュヤワルデネ氏はその後スリランカ大統領になり、90歳で亡くなりましたが、遺言で眼球の片方が日本の、もう片方がスリランカの目の不自由な方のために角膜移植されたと、番組でさらに紹介されました。

東京江戸川区宣要寺の成川上人（54歳）には、学生時代から30年以上にわたり妙光寺のお盆のお手伝いいただいています。この話に直接関係ありませんが、師は日本に留学する多くのスリランカ人僧侶の保証人を長年引き受けるなど、数々の支援を続けておられます。

お経はただ読むだけでなく、このように説かれている内容を実践することが一番大切です。しかし漢文のままのお経では、現代の私たちには内容すら理解できないのも現実です。わずかずつですが、お経の内容をこのページでお伝えできればと思っています。

教えて お上人

質問

妙光寺は700年前に3つのお寺から始まったそうですが、当時のことを教えてください。

700年前の正和2年、日蓮聖人の孫弟子にあたる日印上人によって妙法寺、蓮華寺、経王寺の3カ寺が開かれたのが、妙光寺の始まりです。

日蓮聖人と三題目

鎌倉幕府から佐渡流罪を言い渡された日蓮聖人は、文永8年（1271）の10月8日に寺泊から船出されました。しかし悪天候で角田浜に漂着され、ご上陸の地に『岸の題目』を書き残されました。

そのとき現れた老翁に「近くの岩屋に住む〝七つ頭の大蛇〟を退治して欲しい」と願われて、日蓮聖人は法華経を読み大蛇を教化し改心させました。この記念に再び老翁に願われて、近くの岩肌に『南無妙法蓮華経』のお題目を書かれました。老翁も隣にお題目を書き、その下に『八幡』と書きました。これを『岩の題目』または『日蓮聖人・八幡大菩薩書き分けのお題目』と称して現在もお祀りしています。

翌日、日蓮聖人は日本海に船出されました。しかしまた風と波が強まり、船が木の葉のように揺れて遭難しそうになりました。その時日蓮聖人が船頭の使う棹で、波の上にお題目を書かれました。不思議なことに『南無妙法蓮華経』の文字が水面に浮かび上がり、海は穏やかに静まり、無事佐渡の松ヶ崎海岸に上陸できました。これが『波の題目』です。この3つを称して『角田の三題目』と呼びます。

岸壁の中央あたりの石にお題目が遺る

始まりは一山三カ寺

角田浜はこのように、日蓮聖人にゆかりの深い霊地です。お弟子の日朗上人も、佐渡の日蓮聖人をお訪ねする際に何度も立ち寄られました。そのお弟子で越後生まれの日印上人は、教えを広めるため郷里に戻られ各地に寺を開きました。節分の鬼踊りで知られる三条の本成寺もその一つです。その日印上人が『角田の三題目』にちなみ角田浜に開いたのが、角田山妙法寺、角田山蓮華寺、角田山経王寺の3カ寺でした。併せると「妙法蓮華経」となり、これを〝一山三カ寺〟と呼びます。そして真言宗国上寺の僧侶から改宗して弟子になった妙法坊日弘、蓮華坊日経、経王坊日忍の三人に、三カ寺を与えたと記録にあります。

先号でも紹介した岩屋の〝七つ頭の大蛇〟は、後に『七面天女』としてお祀りされています。往時、国上寺は修験道という宗派で、山伏と呼ばれる僧が国上山から角田山まで活動していたはずです。ですからこの〝七つ頭の大蛇〟は、実は国上寺の7人の山伏のことではなかったかと想像しています。

その後

当時から角田浜は交通不便な地だったため、開創120年余の頃、蓮華寺は県内新発田市に移転して蓮昌寺と改称、経王寺は村上市に移転して現在に至りました。蓮昌寺様からはこの10月、開創700年法要のお招きをいただいています。

そして妙法寺が妙光寺に名を改めて、現住職53代までの歴史が続いているのです。

寺庭から　小川なぎさ

「私も修行します！」

暑いやら大雨やら、しんどい季節もやっと終わりが見えてきましたね。夜の涼しい風がきりきりしていた心を少し穏やかにしてくれる、そんな夏の終わりです。お疲れはでていませんか？

暑さの中で嬉しかったことは、毎年春に植え替えている蓮がたくさんの花をつけてくれたことでした。昨年ミガキニシンを入れるといいよと教えてもらったので、大盤ぶるまいで入れたのがよかったのかもとか、古い土と新しい土の配合割合が良かったのかもとか、まるで楽しい実験をしているようでした。

また娘の良恵がリョウケイと名前を変えて、初めての夏でした。盆の棚まいりでは、弟子の平山とともに、役員の皆様にはお忙しい中ご案内いただき、本当にありがとうございました。赤ん坊が経験をつんで大人になるように、どうかこれからも人生の先輩として、いろいろとご指導をお願いいたします。祖父である先代を知らないリョウケイが「先代によく似てるね。」と言われたと、にやにやしていました。これからも私も知らない昔の寺の話などを、聞かせてやっていただけると幸いです。

実は私も、この夏は修行をしようと思っていました。それは「手始めにグズグズ言わずに仕事をしよう」ということでした。いつも平らな気持ちでいられると仕事の能率もあがるし、なにより怒りは脳細胞を壊したりストレスになったりすると何かの本で読んだこともありました。それから高校の先輩で安穏会員になった方の奥さん（彼女もまた小学校からの友人）に、気心のしれた関係なのでつい愚痴をこぼした時「なこちゃん（私の子供のころの呼び名です）仕事だよ！仕事なんだから頭にきたらだめなんだよ。自分の思うようにならないのが仕事だし、大変なのが仕事だよ。」と言われたこともきっかけでした。その言葉を時折思い出してはいましたが、キッーとなることもしばしばで、わかっちゃいるけどねぇ…。

娘も修行しているのだから、私も僧ではないけれど、自分なりの修行生活を始めることにしたのです。それは我慢するのではなく、文句を言わない、愚痴を言いたくなるようなことを感じない穏やかな体質に改善しようということ。ダイエットとおなじで、これがなかなか難しい。でもいつか苦しいこと、辛いこと、困難に見舞われてもシーンとした静かな気持ちで対処できるようになるということが目標です。「心おだやか行」と名付けて（笑）

忙しいなか時間をやりくりして行事にご参加くださった皆さん、何度も何度も寺の掃除や準備に気持ち良くおいで下さった皆さん、お疲れ様でした。秋から冬にかけても楽しいお寺参りを！　よろしくお願いします。